

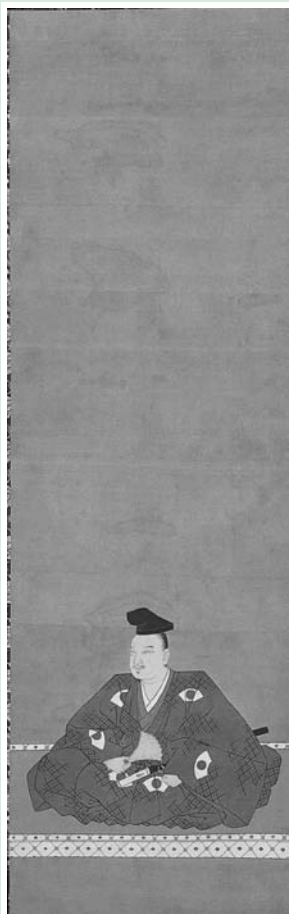
那須与一伝承館通信〈第7回〉

◎那須資高画像

今回は那須与一伝承館が収蔵する資料の中から、那須資高画像を紹介いたします。

本品は、風折烏帽子（立烏帽子の頂を折りふせたもの）と紺地に白く扇の紋を染め抜いた直垂（鎌倉時代の武士の正装を着けた武士の画像です。絹本着色（絹布に色絵具で着色した）の掛軸で、江戸時代に描かれたものではないかとみられます。この人物こそ、皆さんがよく知っている那須与一（宗隆）（宗高）です。

しかしながら、この掛軸の名前は、「宗隆」ではなく「資高」となっています。なぜでしょうか。この掛軸の箱書には「資高公御影」と記されており、一見すると、与一の父・那須太郎資隆（資高）の画像かと思われま



那須資高画像

しかし、那須家ではこの掛軸を与一の画像であると伝えていて、この武士が扇の紋の直垂を着けていることから、描かれた人物は、扇の的を射落とした与一宗隆であると推察できます。

また一説によると、与一は屋島合戦の後に那須氏の惣領となり、宗隆から資高に名を改めたといわれています。したがって、与一は宗隆（宗高）・資高（資隆）など、さまざまな名を称していたことがわかります。

現在、この掛軸は那須与一伝承館において展示されています。激動の時代を生き抜いた那須与一の姿を、ぜひご覧ください。

■問い合わせ

那須与一伝承館

TEL (20) 0220

彫刻周遊 15

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

大田原市役所東別館の玄関に入った右手側のロビーに、何とも愛らしい姿をした2体の像が並んでいます。1体は両手を耳の上にかざしておどけたような表情を見せ、もう1体は両手で顔を覆い、恥ずかしさを隠しているようにも見えます。ノミの削り痕を全体に荒々しく残しながらも、それがかえって木の持つ柔らかさや温かさを伝え、ほっとさせてくれます。



やまねこ座

小高 藍 1998年

星の輝く夜空を眺めていると「心の端の汚れが洗い流されていくようだ」と語る作者は、

雲や街の灯りや空気の汚れに邪魔されて星が見えないことが多いと嘆きます。しかし、シンポジウム作家として過ごした大田原で、澄んだ夜空の美しさに感動したと言います。



小高 藍さん

「やまねこ座」は冬から春にかけて北の空高くに昇る星座で、暗い星ばかりのためあまり人目を引きません。そんな星座を作者はしっかりと見出し、「心の端の汚れを洗い流す」ような作品に仕上げたのでしょうか。

この作者は小高藍さん。1976年千葉県生まれの千葉県育ち。1998年に那須野が原彫刻シンポジウムに参加した時は、千葉大学教育学部4年生。江戸後期に全国を遍歴した修行僧で多くの一木作りの仏像を残した木喰（もくじき）の展覧会で刺激を受け、木彫の世界に夢中になったそうです。大学卒業後は個展の開催や展覧会への出品をしながら創作活動を続けています。

設置場所案内図 (★印)



■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718